



世事百談

二

陸
7
二

僧 5
349
2



門曾
號349
卷 2

鳥獸昆蟲
物化

世率百談卷之二

物化

明治二十二年十一月五日

坪内権蔵氏寄贈

東洋大学蔵
餘下町百拾番地
坪内権蔵

譚子化書子老楓化為羽人朽麦化為蝴蝶自多情
而之有情也賢女化為貞石山蚯化為百合自有情
而之有情也
鳥獸昆蟲の變化するものハト云ふ不免なり
子田胤の駒子化し雀の蛤とあり
此れ蝶子化するものハ世の人若小目あれき
いまだ見聞しあれざるものも亦理外の事あり
蜻蛉魚といふ一種ありそハ蛇の化したるものあり
雜志子蛇の蟻とあり
龍子化したるものあり
山居四要子

りありのうらあや人をとめてつけつてをくまうくおんをわくま口ハ
いとおきくまけて體ハ足なり延るとんをて動脈の運動體の上
みあつたてんも氣をころきんち一人の老嫗をばあうくつるハ桑
香をさうく一掃の本へうくやくときハ三ひきのめはあふ必ひと
つハ及鼻子化る桑香あうものどでさればいある桑香の委化す
るまやそのえさけハせれもあうれどづれ口舌をせれハ合身こ
とくく及鼻とあうところきころあういこのもえさう根維ハ金
雞たんの子るれ家奇品を蔵すハ豆性あり三豆あうりのハ本
竹もえさうとくろの豆のめ古もきうきうとととと

下野國藥師寺

あつたのちくろあうり
下野國河内郡あう藥師寺ハ國史子をもえさう三戒壇の一あり

むり鑿真本為我朝へ律部を傳へ弘めひ一州聖武上
自これ報子あうて東國の沙つハ此寺の戒壇より受戒すく
西國の沙つハ筑紫北觀音寺より受戒すく中國の沙つハ
大和の東大寺より受戒すく三所の戒壇をばさうた
まうこれの世より本寺本山とつるものをもあつハおれを
あつる鑿真和尚此をハ宋の高僧傳扶桑畧記元亨新
書本朝高僧傳及び思託の東証傳子えさう人れあうととと
外ハ騎場より三所をさうり前法師堂とつるあり種橋の
日きさう本堂おこれハ藥師如來を安置し右左小弘法興教
の二大師をおき前子珍弁等をさうり恒持此僧くえさうハ
州鞋をさき井の石よりあう鋤を洗ひてあう知事傳とを

一ハ襪褌の衣を着て、龜卜小大を焼く事自誠子僧の如く
はるすす、僕ハ三人もあらず、農事をあはせしむる寺僕子
業のを彩るく、戒壇の古跡を尋ねりしむる、紐抱きての
角ある堂ありて、中子誕生の釈言れ像を並り、戒壇を
建するハ地法ありて、具子や南山の初筆抄をよむるは
ど、この堂ハ戒壇の制法ハ少も似ず、杖の神は草を
て茂りて、懐古れ、漢子地がく、二六未法ハハひあらず、如来の
教法ハ世ハ盛あれども、戒律のうらむく、おとろへんとてあふ
て、まら子あひびき、のせひあり、今も戒壇の下子ハ天竺の土
ありて、床の下子ハく、そのあり、鑿真の傳を、業を、ふ
祇園精舎の土三平と據り、三戒壇の下子埋むとあは

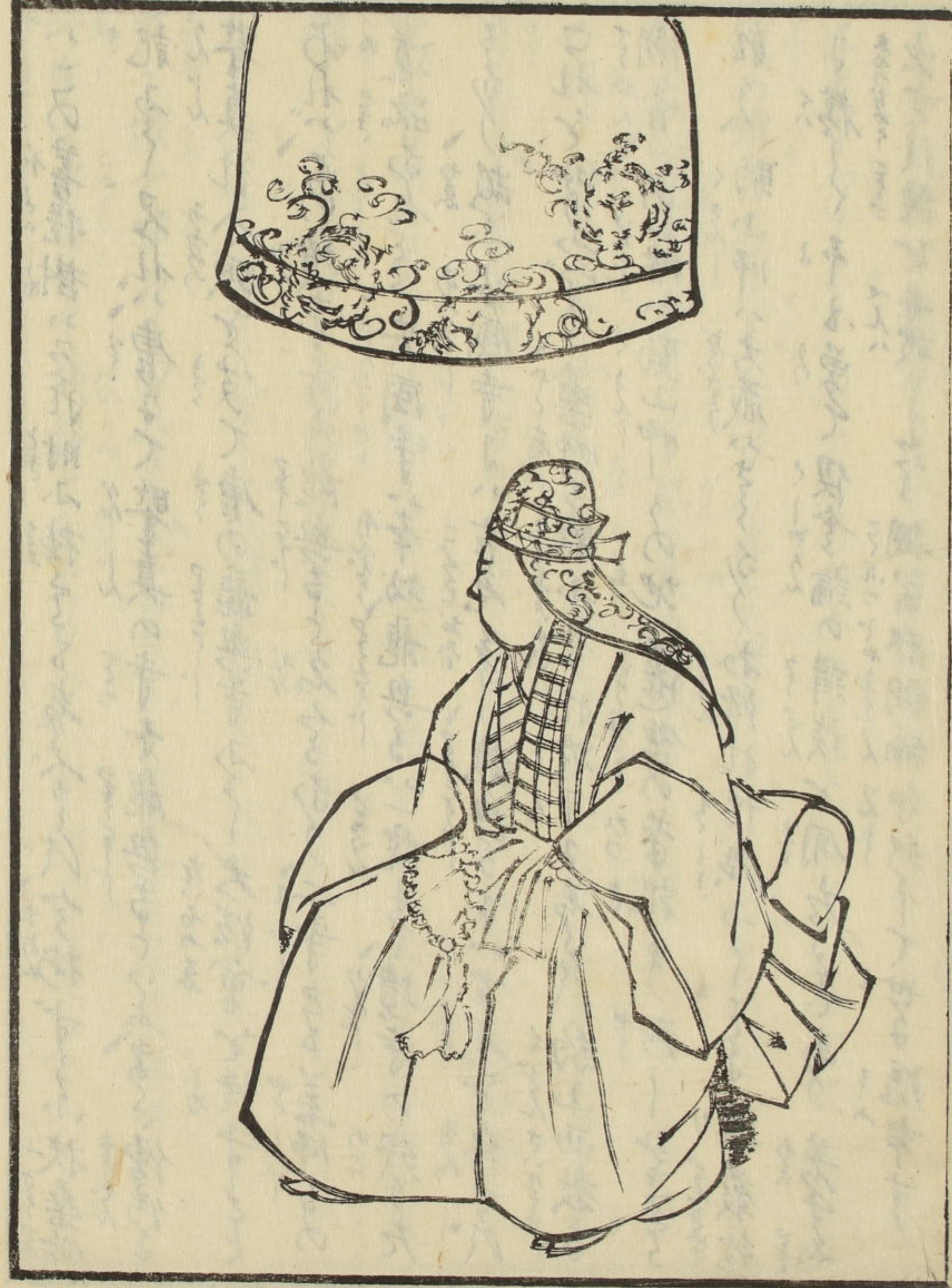
ハ據り、ろあき子あり、竹樹の中を分け、寺に
ろ小至る、この所を堂跡と字せり、塔跡も、堂跡も、埋言して
明く、ふ日ま、更月え、餘の古寺の跡と、く、て礎石ハ一
所も、な、た、碑瓦のミ路、れ、く、く、子、結、満、り、た、ま、く、業、師、も
このハ文字ある瓦ありと、四方子盛あり、れハ、只、麦、押、の、懸、ひ
あり、く、ん、き、の、ま、き、子、を、一、あ、ち、を、安、國、寺、と、し、て、されども
古、北、業、師、も、あ、る、と、疑、ひ、れ、一、足、利、初、軍、の、と、き、一、國、子、一、寺、を、建
て、安、國、寺、と、名、つ、け、り、押、り、子、此、寺、も、その、時、子、寺、号、を、改、め
し、の、あ、る、ん、天、子、詔、あり、寺、号、を、武、持、の、布、子、改、め、り、ゆる、こと
ゆ、ゆ、く、れ、と、母、の、地、ひ、あ、る、く、一、ま、て、寺、を、と、く、跡、子、至、る、右、の、方
子、跡、あ、る、の、あ、あ、り、と、い、ふ、二、れ、ハ、業、師、も、た、る、が、屋、を、跡、子

る、方龍無きあり、今ハ燒失して小堂小屋のあり、堂
北左子小き木戸ありその内小小き岡あり、これを弓削道
鏡の墳とす、上子ひとり古碑あり、文字存せざるも
の、又山下のうささし、鑿真の塔あり、そののりま、道鏡
の碑子似る、あれども正面子鑿真大木あり、天平宝字の年
号あり、折少小碑ハ古物あり、文字の漫滅、志たれハ後世彫り加
つ、そののと見え、前子菩提樹を植う、これ又鑿真の菩提
樹子や、木末の、佛牙子又これハその縁子ききあり、この地
あり、遷化子、あつね、戒壇を周き、律比鼻祖あり、ハ、この
所子塔を建た、あつね、五百年むらさき子、密嚴律師の業
師寺を中興して、戒律を弘え、あつね、本朝佛牙子又見え、これ

ハ、の菩提樹ハ、此時小抄にもあつね、今概す、小扶桑略
記より、又北ハ、唐子、鑿真の寺を龍興寺とす、あつね、僧傳子
鑿真北入滅とす、唐の龍興寺あり、大法會を修すこと
あり、北ハ、の墳寺を龍興寺と名あり、二寺とも、華師子の
遺跡あり、安國寺ハ、本坊龍興寺、二院子、墳寺の残りた
るあり、故小安國寺子、古瓦多し、龍興寺子、古瓦を存せ、
これを抄す、華師子、駒小亭、北塔下子あり、駒山西教寺
潮音ハ、一、條ハ、駒山師の地子、遊歴の寺記あり、所ハ、抄す、
如久、駒山師ハ、大蔵ハ、あり、お清、北持識あり、こ、華嚴經
子、抄す、予も、曾て、俱舍論の講談を聞たり、あり、華師子、
出定後語を弁破したる、撰撰邪網編印、終して、世子流布す



三
五



三
五

道成寺

道成寺の謠曲は安珍清姫がてはむと法華験記に足るて嘉
婦と旅僧の事として名を著るるに元享初書の安珍が傳子
その事を著るるに安珍がとてり、日言川の繪詞あり成
ちの繪詞もひびく安珍がとてり、又賢学お
語として賢学といふ傳の事として傳はる画考一考あり、その乃
成らんとて謠曲に傳はる時、安珍がとてり、此伝に娘清
姫が嘉嘉すといふ、小伝をいへ、許多此脚色を著る、お
子まかごハ氏子ハあつて異名あり、あつて小娘をいふ、寵愛
すといふ心あり、愛子の伝司とハ名づけ、あつて、これハ謠
曲の文句、小伝に娘と寵愛乃あり、子まかごといふとあり、愛

(三) 五

子とまかごことよめり、ことハ万葉集の歌に、

人あふばおやの事かどそあさのよひ紀北川上の山とせの山

あつて佳き糸の我のし、まをむすめといふ、調もなるといふ、

寺を瓦葺といふ

神宮の忌刻に寺を瓦葺とす、異稱、日帯傳子、本朝舊
制、皇宮用、捨皮葺、佛寺用、瓦、故、神事忌言、佛寺、同、瓦
葺、出、延、曆、儀、式、帳、延、喜、式、等、書、と、あり、地、り、不、そ、の、う、へ
貴人ハ捨皮葺を用ひ、賤民ハ板屋茅葺を、常の事とせられ、
おろ、あも、板屋わら、月、茅、が、の、き、端、を、と、あり、只、ち、院、ハ、杜、藤
を、ま、う、と、す、れ、ハ、瓦、葺、子、造、り、と、あり、唐、土、中、也、
とあり、孔平仲が談苑に、羌人最重佛法、居者皆板屋

(三) 六

惟以瓦屋處佛と云々

實方朝臣の言子

解れ、されど、資をすゑる事あり、
減之、これ資をすゑる事を何社と云ふ尋常の誼なり、されど揚
子方言子凡草木刺人北燕朝鮮之間謂策或謂之
杜とあり、子凡草木刺人北燕朝鮮之間謂策或謂之
杜とあり、子凡草木刺人北燕朝鮮之間謂策或謂之

義子て、資をすゑる事を一社と云ふの、杜人子ありて、敷を言ふ

京周 田舎周

三百二十歩あり、これ一年三百二十日、民は食料一
日、歩を歩づれば、積り、六尺五寸四方あり、田舎周ハ、座長以
後、これを、三百歩の所定めとあり、一也、是子、六尺繩を用ゑると

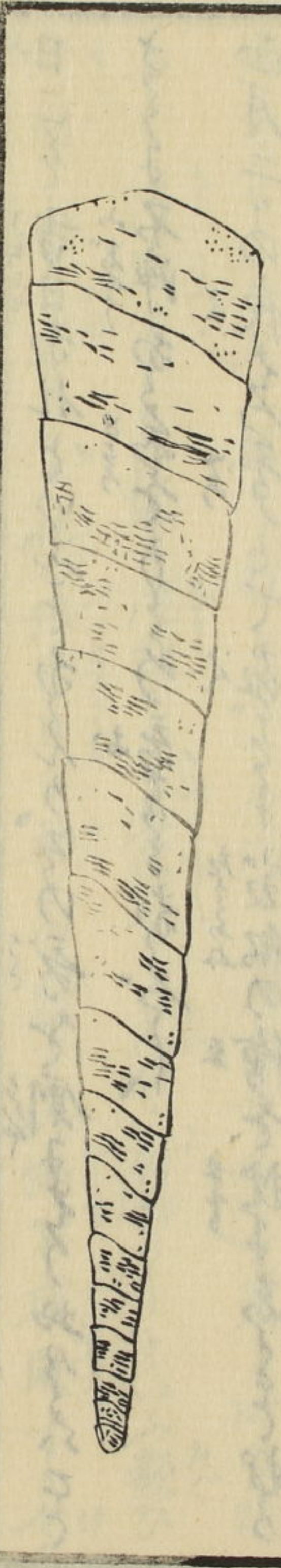
格天井

格天井と云々、天井と云々、文字子ハ、書言字考を、合天
井とあれ、いづれ、おぼつち、格天井と云々、

志ひて詠べし... 船ハ船のつらや... 世話燒草の附合子戸と... 戸をどある船を... ころろと... 詞のこと

二ささ笛

蝦夷人の吹く二ささ笛... 長さを五人五寸すよう二尺まで... 丸く割し...



古歌よ

二ささ笛... 龍宮船... 霧を吹や... 身をうらや...

神社の位階

神社の位階... 正一位...

まこと、令此言のどしきを今ハ一步田もきく有名無実子
して稲荷と云ふハ必正位ありのど世も必社家ありも
免許するをさう

氏神

俗子ふすの神社を氏神と云ふはあやまりあるはつらの
よりいふありひん日件録子世人以神明主于我
所生之地謂之氏神と云ふはをきとあもあはるる
と氏神といふは後氏の春日明神を奉りどきり氏の神を
里伊勢物終子むり二條の后まご春子の御息所と申す
小氏神子まうぐもひらとつとありこれハ大原所の社を
古今あま集子ハす子大原所子まうぐもを書り藤氏此氏

神ハ春日明神あるも京よりハ及のやとをたれ仁明天皇
嘉祥三年子周院左府を嗣のむり平城大原所子勸誘
あり、あぐ王城ありひ小後氏の守護神といふありあり
女妻終子平家の氏神といふと見ゆこれハ平所の社を平
那を平氏の氏神とするよりハ古事記傳子も見ゆ人まご平
盛衰記子一幡の神松名を護り玉ひあわれハ神護者と名づけ
る故子此寺を和氣の氏寺ありとあり、神社のあり氏寺も
ありと知る、推氏神氏子の辨れありまよハ平好同質
疑子ありたれと今をひらうまよのさうこまよ

弥陀の手系

新古今和歌集の法園上人此言子

おぼあつゝ仏の心子多々系此終り又なぬんもも

長林記元永二年十二月四日の條、阿弥陀佛手付五色
糸引付件佛去年臨終料下、寧所奉作也、まゝ盛衰記
小仏の心子不_レ在_レ結付五色此糸引_レえたるも、心陀子てさく
も_レ又_レ々々_レ奉_レ託の_レりき、法苑珠林西域祇洹寺菴を引
て_レる

鳥ハ白

禪宗の寺院子延宝元祿此二もあつ石塔の上の_レ子_レ鶴あつハ
鶴あつハ鷺をどの文字を彫りたるあり、の宗旨の傍あつとて
知_レの_レを_レく_レび_レり_レより_レ鳥ハ白と_レま_レま_レれ_レの_レ何_レ此_レ義_レと_レい_レふ
と_レ詳_レあ_レず_レ予_レが_レ弱_レ冠_レの_レる_レ聞_レ々_レ梅_レ塙_レ先_レ生_レの_レ説_レ子_レ二_レハ_レ隨_レ未_レ咒_レの

中あつ_レは_レ却_レ元_レと_レふ_レ文_レの_レ元_レ字_レを_レ釋_レと_レ鶴_レと_レ々_レその_レ鶴_レ字_レ

を_レあ_レや_レま_レり_レて_レ書_レ々_レあ_レつ_レと_レて_レ鶴_レ字_レ子_レす_レが_レれ_レる_レ切_レ短_レあ_レつ_レり

ハ曹洞引導集_レの_レる_レの_レ子_レ也_レと_レい_レま_レる_レ、その_レ後_レ大_レ隨_レ未_レ陀

羅尼_レ經_レを_レよ_レめ_レ、不_レ就_レと_レあり_レて_レ經_レ子_レ時_レ被_レ苾_レ芻_レ無_レ救

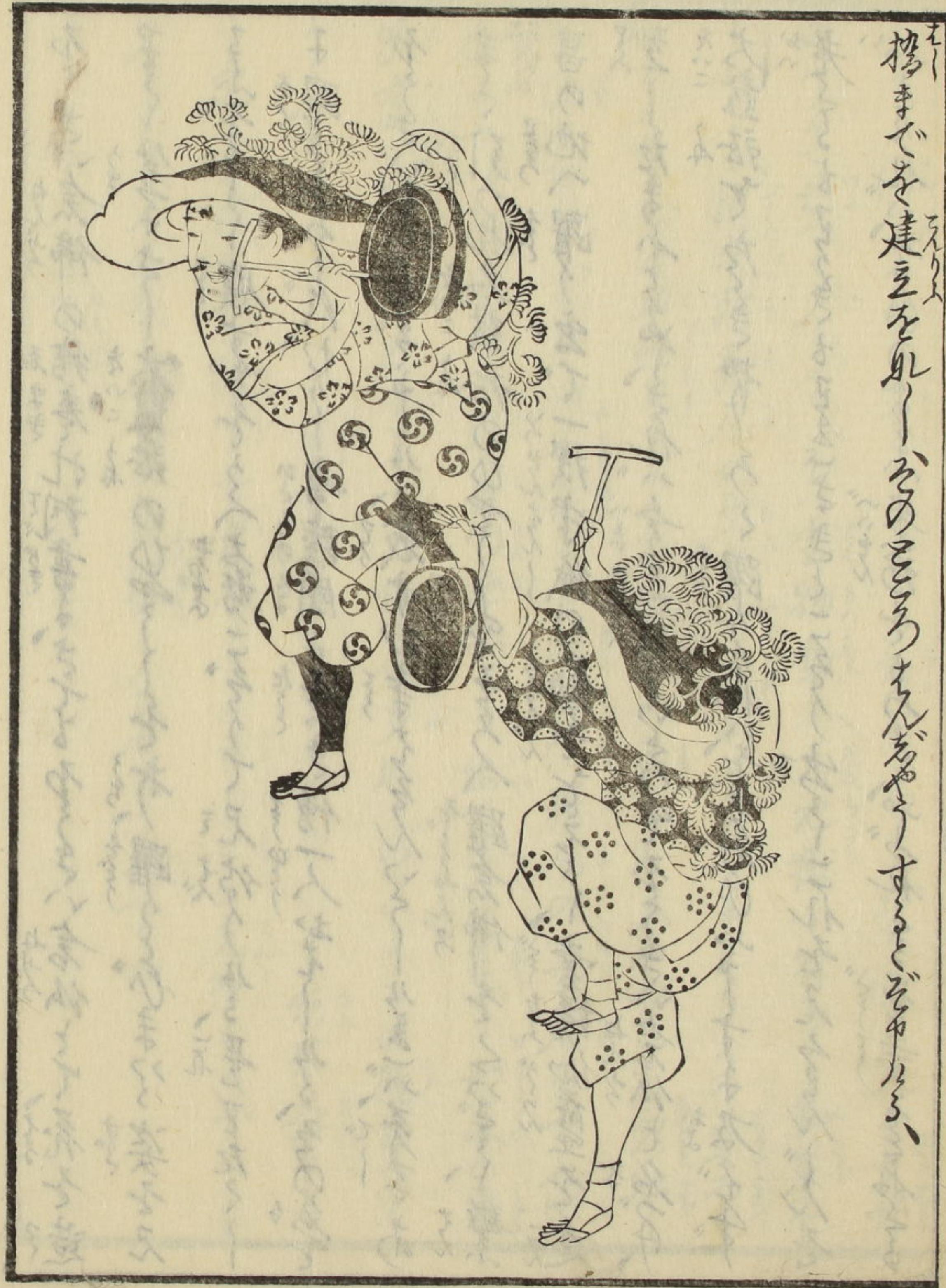
清_レ者_レ作_レ大_レ叫_レ声_レ則_レ於_レ其_レ處_レ有_レ一_レ婆_レ羅_レ門_レ優_レ婆_レ塞_レ聞_レ其

叫声_レ即_レ被_レ詰_レ彼_レ病_レ苾_レ芻_レ所_レ起_レ大_レ悲_レ愍_レ即_レ為_レ書_レ此_レ隨_レ未
大明_レ王_レ陀_レ羅_レ尼_レ繫_レ於_レ頸_レ下_レ苦_レ惱_レ皆_レ息_レ便_レ即_レ命_レ終_レ生_レ無
間_レ獄_レ其_レ苾_レ芻_レ屍_レ殞_レ在_レ塔_レ中_レ其_レ陀_レ羅_レ尼_レ帶_レ於_レ身_レ上_レ因_レ其
苾_レ芻_レ繞_レ入_レ地_レ獄_レ諸_レ受_レ罪_レ者_レ所_レ有_レ苦_レ痛_レ悉_レ得_レ停_レ息_レ咸_レ皆
安_レ樂_レ阿_レ鼻_レ地_レ獄_レ所_レ有_レ猛_レ火_レ由_レ此_レ陀_レ羅_レ尼_レ威_レ極_レ力_レ故_レ悉
皆_レ消_レ滅_レと_レい_レる_レ人_レ大_レの_レ經_レ説_レあ_レつ_レ隨_レ未_レ咒_レの_レ切_レ短_レハ_レあ_レつ_レる_レの



菊庭琴

二五



揚子でを建立を丸くらのさうろちんあやうすまごぞやん

二六

發鯨音鱗甲光世欲倍尋と云う、この詩はサビキヤウハ
初めハ云く懸ておさる魚形化版あり、後子形の變じ、今
の如くありても懸懸る如く、並ておハ後のことにてこれをお
ついでて鐘児をよめる、いよくまゝ後のことぞおのそる、

謠抄の勘文

謠曲の抄和子謠古抄と稱す、注釈あり、その書の時代ハ文祿年
同子撰、一ゆのと地とをいふ、第一ある熊谷の注小百聯抄解
のよとをいふとして、この年ハ嘉靖四十二癸亥年あり、書如
文祿四年己未年まで、二十三年ありとあり、又芭蕉杜若等、
もこ子同、おのむきよ載り、ゆり子この謠抄の撰、二人の手
子あり、そのの子ハある、ゆりその證ハ、熊の注小一仏成道觀

見法界草木國土悉皆成佛、此文を山門空地坊證、
陰經の文とハ引され、今彼經を考ふる、あり、遊
折の注子中陰經云、草木國土悉皆成佛、西の櫻の注子草
木國土悉皆成佛、是中陰經の文也、當麻の注小中陰經、一
佛成乃觀見法界草木國土悉皆成佛と説た、まふ、あるを
及ハ、後の三條八雲地坊の説、いゆの一條ハ、他人化悉あるとあり
一これよりして、抄のふ、これ抄ハ諸家の説を集録した、ものと
及、そ、抄三編の注子、未歷ハ、神なり、記、い、と、さ、人、き、ゆ、の、あり
阿彌の注子、誓のあり、吉田殿、い、尋、ね、あ、ら、ま、ま、と、兼、平、化
注小我たるを、敵山のてあり、垂、と、ハ、天台宗あり、あ、ま、ま、ら、ん
一、小、塩、の、注、子、神、も、ま、ら、ん、座、の、世、和、克、同、塵、の、と、吉、田、殿、注

あぶら、蟻通の涇子、おえ此系小神たりありありや、
の涇子山中、技やす、葛城の涇子、紹巴中、
家々の説を、集められ、ゆめとあそぶ、また、
典授のつまひ、あつぎるをあり、その富士、
くん、思はず、又、静の涇子、をとり、
ざるあり、自然居士の涇子、然れ、
書をたり、船の字と、舟の字と、
をくハ建仁寺の月舟へ、相國寺、
子、えぬとあり、出雲、未審、
小、秀、次、園、白、の、時、
三十一

慈照院子、聚まり、故、事、も、其、家、
多、り、と、い、ふ、子、金、く、符、
愛、せ、し、と、唐、土、の、さ、
出、し、ち、ん、ら、う、の、
の、類、少、く、不、審、あ、る、
か、き、假、名、う、き、の、お、
と、い、ふ、大、お、あ、り、
と、い、ふ、舟、の、蓋、也、と、
し、て、言、上、す、諸、人、
三十一



三又三十



三又三十

二の二條南畝の記より抄出す、
孝力ありその敏捷滑稽抄ひやぐ、
若のうきき、
を先く、
偶田川舟の内此又句、
ハ、
ク、
境の上を、
ま、

の謡曲も、
ろ、
厄者の、
と放つ、
あやまりて、
うハ、
事、
始、
月、
諺、

征伐 其敵を討ち平ぐ大御神託宣して曰金義の間多く殺
生を致す宜く放生會を修すべし者諸國の放生會この時
より始りありききを清元のあられをむかひの唄を聞く
養老四年中の林とてさうらやる清水子勸修寺あり後
この八月十五日あれ諸國子をもあまのつらづかひ
子改めしことよむとて抄くおるごとく 何れもあまのつらづかひ
書物なるをあまのつらづかひ
讀書會意子、余少年時好院奉以今考之年實者十
而一二皆存善惡之戒、追松氏書行據實者十不
一二使人不知、傳壞風俗、亂倫理、不可勝言、經三十三
餘、年見女好尚、大興昔別老婦、撫見女、絕不及古之

東無誦勸戒之語、嗚呼、近世之罪不容誅也
腹子子れあらうかまて
壇浦兜軍記あやぶ琴賣の辰小腹子子のあらうかまの拾
鹽ひて水のおやせりいふ又向をあらし人腹子子れあらうかまて
いふとのときぐさるれどて因りしる子平らうかまてはかまの
新記子て蟹の一握あり、和名類聚抄小擁劔奉草云、擁劔
和名加散女、似蟹色黃、其一、整偏長三寸、また、奉朝
食、鹽子、凡奉邦所食者、擁劔石、蟹二物也、擁劔者一
整大、一整小、常以大圍以小、整食物、和名訓稱加佐
女、以生江海而大者、为佳品、用鹽水煮、熟則全體變
作純赤色、脫甲取白肉、和薑醋食、其黃最美也とあり

うごめ 諸書に子擁知子充れと怡顔者介呂子八増蚌子あてと
 里さて解の帯子腹上子卵を合めると最多きかたなりとこれ
 八子の腹上子卵を乃子めりうごめ解の格子鹽水子調理せん
 水責をせめりうごめりうごめりうごめ忠臣蔵九段目の切子うごめ解
 たうごめ若子それ加茂川の水難物をくふせいといふうごめあてり
 うごめ文考あり

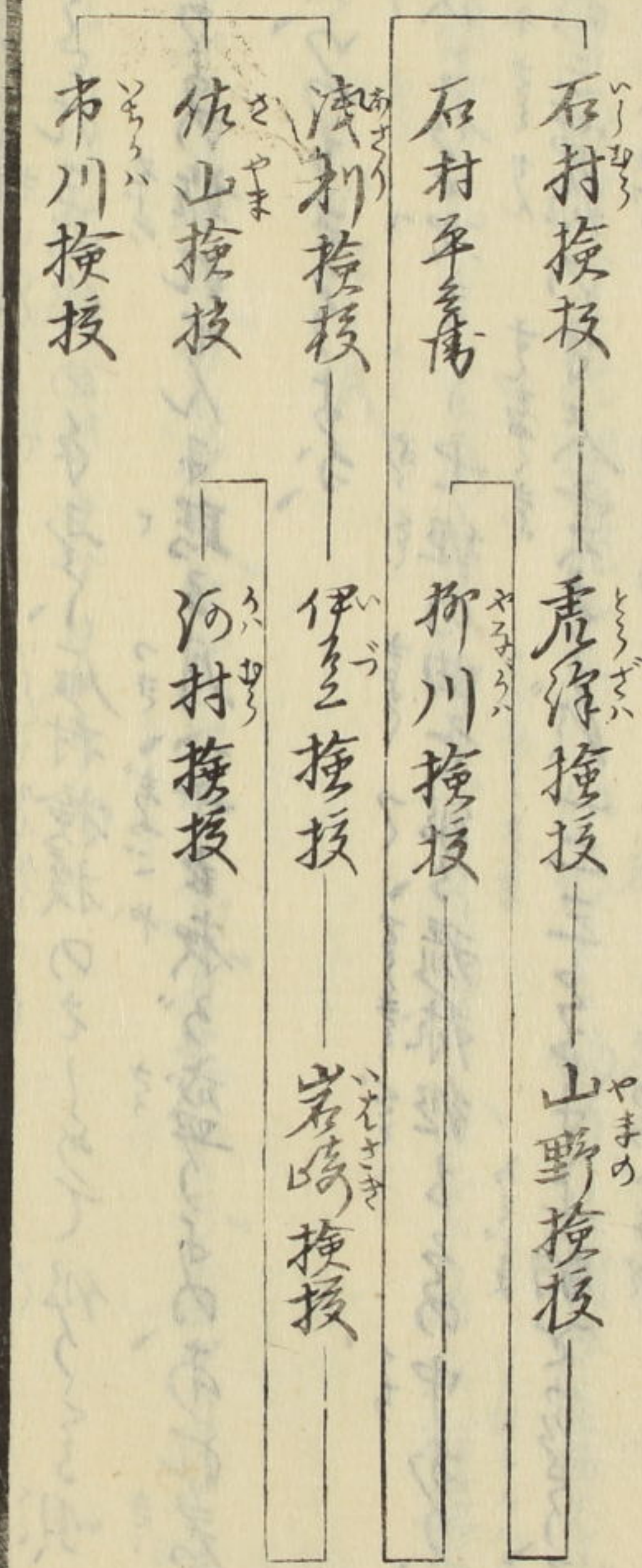
うごめ 蟹 北 園



節付の各目

浄りの節子レイゼイあて三重たて名月をうごめあり、その
 かよりうごめありあてあり、三の園やまぎの長ぐ娘浄りの姫子牛
 若丸の意せりとて十二段子能り、物語節付とてうごめり、
 の物語の志のひは娘子、紫花あて戸をおり、ひらきとてあての
 あてといふ詞のあてとて、更科冷泉かろともあてとて、
 女のまいつとて、これいせいといふ文句のあて、レイゼイとい
 小節の名とあり、あてたきといふ、むり、網笠とて扇と持
 て、手を打たきて、唄よめのをたきて、人倫訓蒙園彙子とて、
 その節を用ひ、あてを夕きといふ、鉾扣の志、此節といふ、ひら
 たり、三重といふ節、あてたき、琵琶の志あり、何れも、うごめ、の師、あて

本手組十三組瑞子組七組ありて二十組あり、今も京方坂にて
 法師のあゝひ傳へ、やんごれまあうれ好おせり、あゝひ八神仏の
 法樂あうてハ弾くことあり、さうりあゝひ此人の為子孫きて聞
 すこととゆるさる、強くあ聖すれハ復すとて強くあ人、二法師
 とのふ考ハ口分の誓者にて、芝居程言すの浄より小言をハ座
 と唱へ、強くこととゆるさる、いまむらとあ人



琉球國の小言

琉球國ハ今もきき、三條線を越すとあり、京師橋川あり南渡
 とのふ人、天明のまじめ薩摩國ハあをひとあり、琉球乃喜登筑
 登々、顔澤基字ハ延純とのふりの三條線を跨き、者同筑登之紹
 進道字ハ隆嘉といふれ小言を唄ふを、きき、時々の孝記とてあ
 る人の見せたる人、

きよのなごうじやきおれが子とあり、ついでをこれにつけ
 ごと、

二のふハ祝儀れとあり、始めをり、子唄や、言妙の謡をうとふ
 が如く、さうり、さて、ほり、さうり、二人、さうり、さうり、さうり、
 一、この人れ、さうり、つ、ぶ、さ、つ、ぶ、ま、あ、よ、れ、も、き、く、れ、さ、や、や、

そこのハ島子住める人、そこの島あり、往くとき、ルをき、海岸
 あり、琉球より十里あり、南にイトシとの島あり、そこの島人の
 舟子裸子て、海中を自由子往來する、その島人が捕の猫、
 船子乗る、うの島、ふふ島あり、小刀と携へ、水中より海岸に
 産子の、うの島の、とて、刀をさし、とて、取、とて、
 小きハ三尺、大ききハ五尺、又、また、あり、その大きき、ハ、三尺、
 つ子切りて、舟子、移、とて、中、海、舟、の、あり、あり、

一樹の陰に宿るも他生れ縁と云詞

いふへ白拍子のうらみ、の、小、河、の、流、れ、と、汲、一、樹、の、み、や、
 三、分、他、生、の、縁、と、云、ハ、説、法、明、眼、論、子、宿、一、樹、下、汲、一、河、
 流、一、夜、同、宿、一、日、夫、妻、皆、是、先、世、結、縁、と、云、云、云、云、云、

書ハ世子聖徳太子の他といひつゝ、
 本、源、平、盛、衰、記、右、平、記、義、經、記、保、曆、同、記、を、よ、み、詞、を、
 た、れ、ハ、少、き、諺、と、抑、り、さ、て、
 かの子載と云、隋張即之詩、
 樹思殊親と何るが、
 田次草など、
 見啼と止る諺、
 手、甲、

籠耳といふ冊子、
 このふと、
 元の世祖、
 といふあり、

どのふハ蒙古國義とのやとのいひあやまらあり鬼がとるとハこれ
夷賊そのふあり又いけ子き子を威嚇とき顔をかめて元
兵ちとつてありむり大木國元兵ちといふち鬼すとい人
とあやまらとて世間さうきとあり奉朝又釋子とさう二礼よ
里して元兵ちと顔をかめて地せ小兒おきやむとさう又小
児をすうとわがとき虎狼まといふとありむらうとさうハ張
遼まといふ小兒をきやむとあり張遼といふをのたけき兵ちて
ありとあり又日本までをさく教子あてを甲といふて小
児をせむともありとやとをさうむらうとさうのハ櫻陰
膚語子といふ元兵ちのトハ南敵著言ありと地わとさういふ
甲といふとハ今王佐國子て見女子との常の遊戯子すといとてそ

の國人祖父江氏のころころ訪ひ来れりそりれおがさうそれ
戯ルハ左木のちと組合せて手此甲をたがひさうちあつて
らとさうその詞の終るころさあはれりゆの鬼とさうむらう
その習人詞
むらうの河東て土器やハ五皿六皿七皿八皿ハ四のちおれさ
づとんどうさう人るれと鬼よとさう鬼よ蒙きくせきとて
くさそのら鬼よ
方言
漢の揚子也、輜輞總代語の想あり、世子揚子方言と号人曰、邦
あくを来越谷吾山と号、俳人の物類稱呼とあふさうあり、あ
人、大木の國此方言とす、人、誘とて、

ていつこぎれさうらちやうらうららんずるあそまつら

おきていつこぎれの果物の美あそきてこぎれとま同いさうを

つちやハ左様とて詞よまらちやハ助語のまらまらり、さつらつ

おそくつら但諸子同く意をよまてうらちちいおとまらけ

んずるハ周炊あそ中食の正あり籠耳は晝食をそとるまら

てその名月たるひあ人侍ハ中食といひ所人の晝食といひ寺がこ

えんしんといひ中食をこぎれよてひる息といひ農人の勤随といひ少

方あり女中の正とまらハ供御といふとあり又風俗又遇の汝

村が南都賦にあり茶をヤチウとあり晝食を硯水といふ

そ人あれも勤随も硯水も字音の假借あり、あそま

つらあそハ魚の名あり大和ハ海子き國にて神事奉礼ありとも

あそそこの海魚れゆきそりて肴ハ宴すここのあとのと

まきそーとつふこらりて、珍肴をそあつらやまのむとれあ

ときこの誘ゆ、出羽の方言をいふ誘は、

あそちや、こいちや、ごさあせちや、

あそハ行といふと、こいハ表れといふと、こさあせハこぎれといふ方言

あり、ちやハ助語よての國よてつらこらとそ盛岡あすの方

言といふ誘ふ

ひらえん不くまら

経路解雙尊あり陸奥の俗ハ濁音多しれつあり、まさハ筑紫あ

よてハ詞のあそむつてんといふ助語をそとつとあり、聞あれも

のハ耳まらりてそらまきまらりとも、今幸よさういふれどてあ

若くありとつて誰たれもいふとみて、をとてとつて調ていの國くにれあまう
 てぞつんとあれあり、すぐ國くによりて品物しんぶつの名なれ異いありはさ
 あえきとあれと調ていの精せい説せつはおろく音おん便べんよりつれて終つひは調ていのも
 そのとらふと多おく、

(Faint handwritten text, likely bleed-through from the reverse side)

世せ事じ百ひゃく談だん卷まき之の二に

